

研究専攻（専門領域）	日本・アジア研究専攻(日本語学)	学籍番号	08CS025
氏名	蔡 梅花	ローマ字	CAI MEI HUA
		国籍 (留学生)	中国
修士学位論文名	連体修飾節のアスペクトの形式		
提出年月日	2010年 1月 12日	指導教員	小出 慶一
体裁 (論文)	72頁(1頁文字数 1360字)	言語	日本語
別冊添付資料等	用例集 48頁		
キーワード	形容詞的用法のアスペクト形式 話し手の主観的認識		
<p>本論文は、「形容詞的用法のアスペクトの形式である「タ」形と「テイル」形は交換可能で意味の違いがない、形容詞的用法なら連体修飾節のアスペクトの形式が「タ」形になる。」という先行研究に対し、言語を言語主体である人間の心と関連付けて考えた場合、話し手の主観的認識によって異なる形式が選ばれるという従来の研究とは違った観点から、形容詞的用法のアスペクトの形式を考察したものである。</p> <p>まず、先行研究を概観したうえで、明治期と現代の文学作品 24 部から収集した 3500 ぐらいのデータを分析し、連体修飾節で使われている動詞を状態動詞、継続動詞、瞬間動詞、形容詞的動詞、内的状態動詞の 5 つの種類に分類し、章を進めることにした。考察するにあたって、「動詞の語彙的意味と形容詞的用法の関係」、「主格と共起できる形容詞的用法」、「形容詞的用法のアスペクトの形式は話し手の主観的認識によって、「タ」形か「テイル」形が選択される」、また、「明治と現代の形容詞的用法のアスペクト形式の使用頻度に変化が生じたのか」、という 4 つの面から分析をおこなった。</p> <p>分析の結果、次のような結論が得られた。</p> <p>① 形容詞的用法は動詞の語彙的意味によって決まる。動詞が動詞本来の語彙的意味から拡張された意味や比喩的用法、慣用句のように使われている場合は、主格が文面に表われていても動詞の種類に関係なく「タ」形と「テイル」形は形容詞的用法の解釈しか出来なかった。</p> <p>② 形容詞的用法のアスペクトの形式は自動的に「タ」形になるのではなく、話し手の主観的認識によって、どちらかの形が選択される。話し手が出来事を事実として認識した場合は「タ」形が選択され、事実として認識したかどうかは問題にせず、話し手が知覚で「継続」の意味と認識した場合は「テイル」形が選択される。ここで、状態動詞はこれ以外にも話し手の焦点の当て方の違いによって「タ」形か「テイル」形が選択される。</p> <p>③ 明治と現代を比べたところ、現代に来て形容詞的用法のアスペクトの形式に「テイル」形が増えていることが観察された。</p> <p>本論文は、今まで統語論的にしか研究されて来なかった形容詞的用法を、話し手の認識のプロセスと関連付けてそのアスペクトの形式を考察したところに意義があると思われる。しかし、今回は形容詞的用法の「タ」形と「テイル」形を研究対象に絞っているが、これは、連体修飾節の諸問題の中の一部にしかすぎない。連体修飾節のアスペクトの形式に関しては、まだまだ明らかになっていない問題が多く、統語論的、語用論的、認知論的なさまざまな角度からの研究を必要としている。これらの問題を今後の課題として、連体修飾節のアスペクトの形式を研究し続けて行きたいと思う。</p>			